

welfare

[ウェルフェア]

2012

48

「3.11 大震災と車いす」

—まだまだ続く、工業高校生たちの挑戦—

CONTENTS

くつきり! 福祉の未来形 ~日社済助成事業報告集

P2 重度障害者の在宅就労の普及に向けた調査研究
社会福祉法人東京コロニー

P4 就労継続A型事業を目指すために必要な
心構えを学ぶための視察研修
ワークセンターさくら

P6 自閉症支援者の為の夜の勉強会
奈良県自閉症協会

P8 3.11 大震災と車いす
—まだまだ続く、工業高校生たちの挑戦—

●事業成果報告集

重度障害者の在宅就労の普及に向けた調査研究

社会福祉法人 東京□□二一

東京都中野区江原町2丁目7

職能開発室主任 吉田 岳史



障害のある当事者自ら「働く場」を開拓

東京コロニーの設立は1951年。当時、「不治の病」といわれた結核からの回復患者たちが、自らの働く場所を得るために印刷や養鶏などの仕事を開拓し、同時に元患者の社会参加を求めて展開した「コロニー運動」が事業の原点となっている。その後、結核以外のさまざまな疾病・障害のある人や、元ハンセン病患者等の就労支援を積極的に手掛けてきた。現在は東京都内4区・7市の20か所に事業拠点を有し、各種障害者サービス事業や福祉工場、就労支援施設等運営のほか、在宅就労支援事業、IT教育事業、有料職業紹介等多様な公益事業を積極的に進めている。スローガンは「障害のある人の完全参加と平等」。

SOHOという新しい働き方が障害者にも増えつつある

障害のある人の就労支援分野においては、近年の情報技術の発達やテレワーク等の働くスタイルの普及により、通信機器等を活用しながら働く「在宅就労」の導人が増えている。当法人では1980年代より在宅就労支援事業の先駆的機関として、在宅パソコン講座、在宅勤務による雇用をサポートする有料職業紹介事業、SOHO支援等を行ってきたが、ここ数年で在宅就労希望者のニーズが増加傾向にあるのに対し、その支援体制の波及には多くの課題があることを日々の業務を通じて実感している。本事業は、こうした背景をもとに、これまで当法人が支援し就労に結び付いた好事例を集約し、その紹介を行うとともに、今後の普及に向けた課題を調査・抽出することにある。事例については当法人を仲介してホームページの制作やデザ

イン等の仕事を受託している個人（在宅就業障害者）に対し取材、ヒアリングをおこない、得られた現状をもとにその背景や考察等を盛り込んだ報告書を作成することに主眼を置いた。

さまざまな観点から在宅就労の問題点を抽出できた

事業実施にあたり、「在宅就労」とは何か、どういう人たちがこの就労形態を必要としているのか、の実態把握を行った。

次いで、すでに在宅就労を実践している当事者に話を伺った。対象者は6名とした。その前段として平成23年6月1日に15名が集まり意見交換会を行ったが、その結果、請けている仕事や就労可能な時間帯、就労歴、他の活動、得意不得意、仕事を行う際に心掛けていること、使用するツール・デバイスなどが多様であることが浮き彫りとなった。しかしこのことこそが「働き方に自分をおわせるのではなく、自身にあった働き方を選択する」ことを可能とする在宅就労の本質とも言えるため、その多様性をしっかりと示すことを視野に入れつつ、在宅就労に必要なポイント等を抽出できるような事例作成を心掛けた。

また、平成18年度において障害者雇用促進法改正の際「在宅就業障害者支援制度」が創設され、在宅就労においては唯一といっている公的な支援制度が生まれたが、「企業等に対し、在



宅就業障害者への仕事の発注を奨励することで就業機会を増やす」制度として期待されたものの、奨励対象となる取引規模が大口に限定される等、現実的とはいえない問題点も近年指摘されているところであり、また支援機関の少なさや運営基盤の弱さという根本的な課題それについての調査言及もおこなった。

こうした取材・調査に考察を加えたものを報告書の形で発行し、関係者に配布した。在宅就労は、就労支援施設で働くといった、いわゆる「福祉的就労」とも、雇用のような「一般就労」とも異なる、いわば「支援制度の谷間」の働き方と断じてよく、また前述のとおり希望者の状況が多様で、かつ増加しているのに対し、そ

在宅就労という働き方のさらなる普及をめざして

の支援政策は充分なものとは言えない。このことに対する問題の指摘も本報告書に含めており、多くの関係者に高覧いただきたいと願っている。

当法人のみならず、全国に散在する支援団体や在宅就労者（その希望者も含む）がどのような活動を重ね、どのような仕事をしているのか、具体的な事例を通じてその実態を知りたい人にとっては、これまでその情報が乏しかったことや、そもそもその多様性からして一概に論じることのできない側面もあったが、この助成事業によってひとつの方向性を示すことができたといえる。類似の研究もみられるものの、この先の在宅就労の一層の普及に向けたきっかけをいただいたと思っている。単年度の事業ではあったが、この助成に感謝するとともに、今後の活動にさらに取り組む決意を新たにしたい次第である。

●事業成果報告集

就労継続A型事業を目指すために必要な心構えを学ぶための視察研修

社会福祉法人友愛会 ワークセンターさくら

福島県富岡町小浜字中央540

生活支援員 佐藤 正昭

こんにゃくは地域との架け橋

社会法人友愛会・ワークセンターさくらは、平成17年4月1日に社会福祉法人友愛会の2番目の施設として（知的障害者授産施設 定員20名）開所しました。

平成21年4月1日に障害者自立支援法に基づき指定障害福祉サービス事業所（就労継続支援B型、自立訓練）の新体系に移行しています。

平成23年3月11日の東日本大震災により、さくら湖自然観察ステーション（福島県三春町）に避難し、平成23年4月15日より独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園（群馬県）に避難しています。

活動内容としては、以下の通りです。

- 【※震災前】
- ・食品加工グループ

こんにゃく（機械生産、手作り）加工みそ、海苔の佃煮製造販売

- ・内職、手芸グループ
- ・ダンボール貼り、部材の数揃え、パッチワーク、雑巾作りなど
- ・職場実習支援

【※震災後】

- ・食品加工グループ
- 加工みそ
- ・内職グループ
- ボールペン組み立て、フォークの袋詰めなど

心構えと意気込み

実施日／平成23年9月12日（月）～14日（水）

研修者／施設長 新妻哲二

生活支援員 佐藤正昭 計2名

目的等／社会福祉法人南高愛隣会コロナー雲



仙)のコロナーエンタープライズ(島原特産手延べそうめん、うどん、ラーメン等製造)、ブルースカイ(弁当配達サービス)、味彩花(パン製造)に派遣して実地研修を行います。今後、就労Aを目指すための具体的な研修内容としては、①一企業として通用する製品(商品)づくりへの取り組み。②本人(障害)の特性を生かした職業的自立を目指すための取り組みや仕事をする事による誇り・意欲・志を高める環境作り。③安心して働ける環境作りへの取り組み。④販路の拡大への取り組みについて、研修のテーマとして掲げ、2泊3日の研修を計画します。場所的になかなか行けない、長崎県コロナー雲仙を今回の社会福祉助成事業を活用させていただき、意義ある研修にしたいと思えます。

南高愛隣会での驚き

先進施設視察研修で社会福祉法人南高愛隣会(コロナー雲仙)へ伺い研修しました。この施設は1978年4月に開所した施設で、現在は事業所数51か所、事業数66事業、利用者・職員総数が1,882名、グループホーム・ケアホーム136棟という日本でも有数の法人です。この数で入所施設が一つも無いというのが驚きで、毎年著名人を招き福祉トップセミナーを行い、理念である「ふつうの場所でふつうの暮らしを」を掲げ現在の福祉の最先端を進み、発信

帰ろう福島

今回の社会福祉助成事業で研修した内容を、具体的に施設運営に活かしていきます。売上アップのためには、派遣研修で得た具体的な内容を盛り込んだ企業の戦略を打ち出すことが大切です。商品開発(新商品)、作業工程、販路の拡大(営業戦略)、このような取り組みを戦略的に実践し続けることで、必ずや売上アップ、工賃アップにつながり、当施設が目指す就労A事業に移行することができるものと考えます。この事業運営をおして、これまで利用者とし

てみてきた方を、労働者としてとらえることになり、労働法制の適用や社会保険等の適用など身分保障が格段に改善されるはず。傷害を持たれた方が、地域で安心して生きがいをもって人生を歩めるよう、一企業として利用者に寄り添いながら支援していきたいと思えます。本拠地福島に帰還し事業の再開を目指し、現在鋭意努力をしているところですが、「福島に戻るロードマップ」に今回の研修で学んだことを活かしていきたいです。



●事業成果報告集

自閉症支援者の為の夜の勉強会

団体名特定非営利活動法人 奈良県自閉症協会

奈良県大和郡山田山町84-10

事業担当者 上島 昌美



自閉症の理解のために活動

特定非営利活動法人奈良県自閉症協会の前身である社団法人日本自閉症協会奈良支部は全国最後の支部として平成10年に発足しました。自閉症の人達やその家族が安心して暮らせるようにとの願いで、自閉症児者の支援、自閉症に関する社会一般への啓発、福祉の増進に寄与することを目的として、その目的に賛同する人達で研修、相談、啓発、療育他様々な活動をしています。

著名な講師を招いての「自閉症理解の為の連続講座」の開催、自閉症関連の映画上映会を毎年続けています。療育キャンプ、野外活動などボランティア支援者を交えた活動も毎年の行事です。会員の例会も毎月、療育部（学齢期の会員）成人部、ケンケンパ（高機能・アスペル

ガー部会）に分かれて行われており、それらの活動報告や自閉症関係の情報を掲載した情報紙を毎月発行し、会員他、行政関係、福祉関係、医療関係、教育関係、各機関、700箇所以上へ送付しています。自閉症の人達が豊かに暮していくには「周りの方々の理解」が不可欠であると痛感しています。広報紙での情報発信以外に、2年前から一般の方への啓発目的で保護者が「奈良HATAHAKAキャラバン隊」を結成しました。「知ってほしいな自閉症・発達障害のこと！みんなちがってみんないい」との内容で、啓発講演を行っています。

支援者養成のためのセミナー

平成23年7月1日～平成24年3月31日において、自閉症児者が豊かに暮らせる為の支援者養成の目的で、研修とその実践事業を計画しまし

た。支援者の方々の仕事現場は曜日や時間を問わずに忙しい現状である事から勤務を終えてからも比較的参加して貰いやすい夜間の時間帯に設定しました。

講師を自閉症支援の専門家、「自閉症 サービス」より招き5回連続セミナーと、連続セミナー直前に公開講座、最後に実践的な体験内容として実際に自閉症の子供さん達にモデル参加してもらった「構造化セットアップセミナー」にて締めくくりました。

自閉症の人の学習スタイルは他の大多数の人とは違う為、いろんな配慮すべき支援や環境を整えないと理想の将来像は望めません。

どのような困難さがあり、どのような療育、教育支援、就労や余暇支援など将来に向けて必要なヒントを映像やスライド、様々な事例などを交えて次回からの5回連続セミナーの重要性を、分かりやすく話して頂きました。

この講座は平成23年度奈良教育大学特別支援教育公開講座の1つにもなりました。

わかりやすい講義が大好評

支援者の方々が仕事を終えてからでも頑張っ

た当事者の方も参加して下さいました。5回連続の中、口コミ等で、支援者仲間からの誘いで途中参加の方も少なくありませんでした。

参加者アンケートでも自閉症人の特性、視覚的、経験的、具体的な正しい行動を伝えるなど支援方法が分かった事や今現実にも悩んでいる支援方法について、1対1でコントロールされた環境設定などのヒントが見つかり、今後の支援に多に役立つとの感想をいただきました。

今回は学校の先生等の教育関係者や福祉行政関係の方の参加も考え、募集案内には先生方や幅広い支援者の方へのお誘いの文面も入れましたが、あまりご参加頂けませんでしたが、子供たちの将来に向けて！の内容から幼児期、学齢期の支援を担って下さる保健師さん、保育士さん、幼、小、中、特別支援関係の先生たちにも大変役に立つ内容でしたので残念に思っております。診断をうけてから成人、老後までの支援が必要な自閉症の人達にとって、幅広い支援者の方に正しい理解をして頂き、支援に関わって頂く為にも研修セミナーの「テーマの選択」「開催日時」「場所」など今後の検討課題です。

実践的な支援方法が今後の課題

参加者の方からの感想などから具体的な内容、実践的な内容がより分かりやすく、継続して参加して下さいる事にもなり、スキルアップに

つながる事を再認識しました。

今回のセミナーを講師の先生の許可を得て、収録させてもらい、DVDに作成いたしました。5回全てではありませんが、これまで、奈良県自閉症協会主催で開催した講演会等の収録も交えながら、DVDを利用しての自閉症理解の為の連続セミナーを開催していく予定です。時間を複数回、設定して、どのような方でも都合に合わせて、ご参加を頂きますよう、現在、場所や時間を検討中です。

更に、連続セミナー終了後に修了者を対象に開催した「構造化セットアップセミナー」は具体的な実践体験として、高度なスキルアップになりました。支援の基本もしっかり再認識しましたが、支援は1人だけではない、グループで支援の大切さも学ぶ、良い体験となりました。少人数参加しかできない為、このような実践的なセミナーを回数開催できるように、トレーナーができるような人材養成にもつなげていけたら理想です。

「自閉症基礎理解」の部分も大切にしながらも、より実践的な支援を学ぶ場を今後も提供していけるようにしたいと思います。

「3・11 大震災と車いす」

—まだまだ続く、工業高校生たちの挑戦—



使われなくなった中古車いすを工業高校生が修理して、海外の人たちにプレゼントする活動を続けている「空飛ぶ車いす学校グループ（24都道府県68校）」。昨年度からは東日本大震災被災地の車いす支援に乗り出し、福島県、宮城県、岩手県に合計330台を送っている。（3月31日現在）

高校生たちのネットワークは全国に広がっており、被災地復興支援を優先するために一時中断していたアジアへの支援活動も再開した。大震災を経験した彼らの活動は、さらに大きな広がりを見せている。この先、被災地に送られた車いすが現地で役割を終えた時には、きっと高校生たちによって再び修理され、海外の人たちにたくさんの希望を届けることになるだろう。

「空飛ぶ車いす」の被災地支援

「空飛ぶ車いす学校グループ」では、日本で使われなくなった中古の車いすを回収し、工業高校生たちが修理して、アジアを中心とする海外の人たちにプレゼントするという国際協力活動を1999年から続けてきた。これまでにアジア、アフリカ、ブラジル等27ヶ国に対して5599台（2012年3月末まで）の車いす

を贈っている。

日本では車いすが、老人ホーム等から年間で3万台以上廃棄されているという現状がある。一方で、福祉制度が確立していないアジア諸国では「原則自費購入」の上、1ヶ月の給料に相当するような高価な福祉機器という位置づけだ。当然、購入することができない子供たちがほとんどである。そんな彼らに、日本の工業高校生が修理した車いすを手渡しでプレゼントする。「空飛ぶ車いす」とは、そんな考えで始まっ

たボランティア活動なのである。活動の中心は「空飛ぶ車いす学校グループ」に所属する24都道府県68校の高校生たちが担い（OBの社会人や大学生も含む）、公益財団法人日本社会福祉弘済会によって輸送費などが助成されている。

これまで基本的に、「空飛ぶ車いす」の活動は海外に向けられていたのだが、

昨年3月11日に発生した東日本大震災の被災地から「車いすを送ってほしい」というSOSが続出したため、アジアに送る予定だった車い

すを急遽、被災地に振り分けることになった。福島県災害対策本部、双葉町（町ごと埼玉県加須市に避難）、宮城県南三陸町、亘理町、気仙沼市、岩手県釜石市、宮古市等々、被災地の避難所を中心に続々と車いすが送られている。移動困難なお年寄りや障がい者にとって、各地では車いすの不足が非常に深刻な問題だった。ノーパンクタイヤに交換された車いすは、瓦礫の山の中での運ぶ大切な運搬用具としても重宝されている。

車いすを「手渡し」で届けることを活動の大きな目的と考えてきた学校グループのメンバーたちは、海外同様、東北の被災地にも直接足を運んできた。現地の人々の声に触れ、車いす以外にも必要とされるものがあることがわかると、それらを自ら集めて送るといった支援活動もスタート。また、宮城県女川町病院の裏手で泥まみれになった大量の車いすを発見すると、「まさに自分たちの出番」とばかりに、その車いすを修理・再生する取り組みも始めている。

日本中を震撼させた東日本大震災は、このように高校生たちのボランティア意識を目覚めさせ、連携と協力の輪を大きく広げているのだ。

全国に広がる被災地支援と連携の「輪」

震災発生と共に「被災地では車いすが必要に

なる」と判断して車いすを送り続けた「学校グループ」の活動は、各地の現場から高く評価されている。当初はなかなか車いすの必要性を感じ取れなかった行政機関や現地支援組織も、復興が進むにつれて認識を新たにし、続々と車いすの提供を呼びかけるようになってきた。9月には岩手県社会福祉協議会から日本社会福祉弘済会に対し、「三陸沿岸の施設で車いす300台以上が不足しており、何台でもいいのでできるかぎり多く提供してほしい」との要請が出されている。

こうした支援依頼を受け、高校生たちの活動は全国へと大きく広がっていく。

たとえば、東京の大森学園高校である。ここでは、6月11日に近隣の中学校にも呼びかけ、「復興支援車いす修理交流会」を開催。参加した150人で20台の車いすの修理をおこなった。さらに11月27日にも再度、修理交流会を開催し、今度は160人による30台の修理を完成させている。

また、東京の蔵前工業高校は、新潟医療福祉大学、神奈川工科大学、神奈川総合産業高校と合同で車いすの修理会を実施。復興支援用16台、アジア向け6台の車いすを完成させた。

福岡県久留米市の浮羽工高の自動車研究部のメンバーは、夏休み期間に中学生を対象とした「車いす整備教室」を開催。そこで修理した車いすを持参して、8月16日から21日まで岩手県陸前高田市を訪れた。学校グループに所属する

高校生の活動としては、もっとも早い被災地入りである。彼らは現地の人たちに車いすを寄贈するだけでなく、草取りやがれき撤去などのボランティア活動にも積極的に参加してきた。彼らの前に広がるのは、つぶれてしまった家屋がどこまでも散乱する風景である。道はもろくも崩れて寸断されており、大きな工場や港はそのまま海の中に沈んでしまっている。高田松原の名物であった松林は、一本を残してすべて流されて瓦礫と化した。地震による津波のすさまじさを、彼らはみな感じずにはいられなかった。

そして、陸前高田市法量地区での活動中のことである。津波による泥や瓦礫で埋まってしまった溝をシャベルで掻き出し、排水ができるようにしていた。泥の中には民家のトタンや雨どい、カーテン等が多数埋まっており、住んでいた人たちの生活の様子が見える。さらに作業を進めると、一枚の家族写真を発見したのである。こんなにも幸せそうだった一家の生活。しかもそれは、たった半年ほど前のことである。一瞬にして様子が変わってしまう自然災害の恐ろしさを、高校生たちは痛感したことだろう。

しかし決して辛いことばかりではなかった。陸前高田市の大自然の中で、彼らは現地ボランティアとともに必死になって汗を流していた。若い人たちが心を一つにして復興・新生に向けて協力し合う姿は、明日の日本の希望を象徴する光景になっていたはずだ。

それだけではない。まさに全国の高校生たちが、岩手県社協の要請に応えるべく車いすの修理を各地でおこなっているのだ。新潟東工業高校で2台。神戸の科学技術高校で24台。浮羽工業高校(福岡)で4台。神奈川工科大学で3台。蔵前工業高校(東京)で2台。神栖市社協(茨城)で3台…といった具合である。現地を訪ねた仲間たちからの報告を聞き、被災地の状況が想像以上に深刻であることを理解した高校生たちは、多くの仲間を巻き込んで運動の輪を広げていった。

被災県の高校生たちも負けていない。岩手県水沢工業高校の車いす修理メンバーたちは、10月24日～25日にかけて特別養護老人ホーム福寿荘(奥州市)と介護老人福祉施設松原苑(陸前高田市)を訪ね、入所者が使う車いすの点検・修理ボランティア活動を実施した。岩手県社協が11月10日に県内の工業高校生に車いす修理を呼びかけ、「いわて車いすフレンズ修理会」を開催。6校の高校生たちが参加し、10台の修理を完成させている。

たとえ被災県に住む当事者であろうとも、自分たちにできる支援活動を着実に進めていく。彼らのこうした動きは、今後の災害時における新たなムーブメントになっていくかもしれない。高校生たちの地道な活動が、世の中を動かすきっかけになってくれればとても嬉しいことである。

「車いすが届いたとき、正直なところ本当に驚きました。半数以上が錆びていて、泥がシートや背もたれにこびりついていたので、車いすを通して、被災地の大変な状態を想像することができました。修理には通常の倍以上の時間がかかってしまいましたが、完了したときはとても達成感がありました。自分たちが少しでも役に立てたことが嬉しいですね」

(福島工業高校3年、加藤達郎)

「私は経験していませんが、神戸も17年前の阪神大震災で大変な被害にあっています。ですから、今回の東日本大震災は人ごととは思えません。被災した車いすは可動部分が錆びて動かず、頑丈なフレームやボルトが折れて曲がるというところでもない状態のものばかりでした。破損パーツは旋盤等で作り、フレームの曲がりやガスバーナーで修正する。どれも非常に難しい課題ばかりでしたが、一生懸命取り組みました。とても喜んでくれたとの話を聞き、ほっとしています」

(神戸市立科学技術高校2年、林 大地)

「初めて車いすを見たとき、『これを授業で直

自ら被災地に足を運び、 学生たちは多くのことを 学んできた

車いすを修理するだけでなく、自分たちも直接被災地の人々に届けて応援のメッセージを伝えたい。学校グループの先輩メンバー(大学生)たちが被災地を訪れた報告を聞く中で、大森学園高校の高校生たちも「自分たちも被災地の人々と触れたい」と強く希望するようになってきた。そこで12月22日～24日にかけて、大森学園高校、神奈川工科大学、新潟医療福祉大学のメンバー総勢30名が集まり、「冬の東北へ行こう!」訪問企画を実現させている。高校生たちは終業式を終えるとそのまま仙台に向かい、その後三陸沿岸の老人ホームに車いすを届けに行くという強行スケジュールであった。

今回の訪問の特色は、修理車いすを届けるだけでなく、現地の人から震災体験を聞いたり、可能な限り現地での車いす修理を実施することであった。ニュース等で東北地方の様子は知ってはいたものの、自らの目で見た被災地の状況は衝撃的であった。

彼らにとつて一番の心配事は、現地の人たちが本当に車いすを必要としているかどうかだったという。しかし訪問先の熱烈的歓迎を受け、それが杞憂だったことに気付き、安心することになる。

「すのは、無理だ」と思いました。錆びもひどく、タイヤもパンクしています。授業でどこまでやるのか疑問でしたが、始めてみると『やるしかない』という気持ちに自然となってきました。それほど津波の被害の大きさが、車いすから感じ取れてくるのです。少しでもこの車いすを使う被災地の方のための役に立とうと、必死に修理しました。東日本大震災を身近に感じるためにも、とてもいい経験だったと思います」

(世田谷泉高校2年、麦谷 薫)

全国の高校生たちの努力の結果、修理不能とも思えた被災車いすを、16台も修理することができたのである(2台は、さすがに修復不能であった)。修理が終わった被災車いすは2月までに女川病院に無事返還され、綺麗に生まれ変わった車いすを見て、関係者たちは本当に喜んでくれたという。

アジアへの支援活動 (ドラえもんプロジェクト)も再開

ところで被災地復興支援を優先するために一時中断していたアジアへの支援活動も、昨年7月から再開している。7月7日にタイ(143台)、10月15日にスリランカ(100台)へのコンテナ船輸送を実施した他、インドネシア、ハワイ、バングラディッシュ、韓国、イタリア、

「(現地に)着いたとき、地元の人たちはどんなふうに自分たちを見るのかとても不安だった。それは称賛の目なのか、嫌悪の目なのか予想ができなかった。しかし地元の人たちの目を見た瞬間、わかった。自分たちがやっているこの活動は誇れることなんだ。素直にそう思うことができた。そして車いすを渡した瞬間、相手の笑顔を見た瞬間、その気持ちは確信に変わった」

(同校2年、関川景太)

この訪問では、15の施設や団体等を訪問し、全国の仲間が修理した62台の車いすを寄贈した他、老人ホーム明成園(岩手県)において58台の車いす現地修理を完了させている。

感受性豊かな青春期にとっても貴重な体験をした彼らは、きつと地元に戻ってから自らの感想を周りの人々に伝え続けていくことだろう。ちなみに7月に女川病院で発見された被災車いす(津波で流された車いす)18台は、神奈川工科大学車いす修理屋(KWR)の呼びかけに応じて、8校の工業高校生(福島工業高校、真岡工業高校、世田谷泉高校、新潟東工業高校、島田工業高校、科学技術高校、倉吉総合産業高校、福岡工業高校)が修理作業の参加を申し出た。海水と泥をかぶった車いすの修理というのは、技術的には非常に難しく、時間もかかるのである。しかし「難しいから、捨ててしまうのでは『空飛ぶ車いす』の活動趣旨に反する。こ

ネパール、オーストラリア、サモア、マレーシア等々、さまざまな地域に車いすは海を渡っているのだ。

アジアの子どもたちに車いすを届ける「空飛ぶ車いす」の活動を、タイでは「ドラえもんプロジェクト」と呼んでいる。ドラえもんは、日本だけでなくアジアでもとても有名な人気キャラクターだ。日本の高校生たちからのプレゼントのシンボルとしてまさにふさわしい。そしてドラえもんと言えば、「どこでもドア」である。この素敵な夢の道具を使って、どこにでも移動できるドラえもんのように、障がい者も車いすを使って自由に移動できる喜びを味わってほしい。そんな願いを込めて、プレゼントする車いすにはすべてドラえもんのシールが貼ってあるわけなのだ。

さらに大学生たちは昨年から新しいプロジェクトに挑戦している。タイに「車いすりサイクルセンター」を立ち上げようという壮大な計画である。コンテナ輸送で大量に運ばれた車いすを現地で再確認すると、多くに不具合が発生している事実が発覚した。残念ながら、現地で廃棄せざるを得なかった車いすも多いと聞く。そのため3年前から修理車いすの点検・再修理活動をおこなうために、神奈川工科大学車いす修理屋(KWR)新潟医療福祉大学MSのメンバーたちは現地を訪ねてきた。今回の試みはこうした動きを発展させて、タイの人たちにも修理技術を習得してもらおうという挑戦なのだ。

タイでは車いす自体が少ないため、工具や部品が少なく、修理経験を持つ技術者がほとんどいないのが現状である。しかし工業高校生たちの基礎技術はけっして低くない。そこでタイのカセムポリテクニク工業高校生に活動の趣旨を理解してもらい、修理会に参加してもらうことになった。学生たちは、キャスター修理、ブレーキ調整、前輪の修理、後輪の修理、ノーパンクタイヤの交換等々の修理（輸送した車いすの50%に何らかの再修理が必要であった）を、片言の英語やイラストカード等を駆使しておこなっていった。ただでさえ暑い気候の中、コミュニケーションが取りづらい仲間同士での修理活動は、楽しくも困難を極めたようだ。

「立ちほだかつたのが、言葉の壁でした。通訳してくれる人はいるのですが、人数が少ないために何度も呼ぶのは気が引けます。手振り身振りや翻訳カードを使用し、なんとか教えることができました」

（神奈川県工科大学KWR、杉浦美穂）

「現地の人は日本語こそしゃべれないが、意外に英語を話せる人が多かった。日本の方が英語を教える教育機関がしっかりしていると思っていたが、そうでもないのかもしれない。来年またタイに行くまでには、英語を勉強して簡単な話くらいは交わせるようにしたい」

（同校、佐々木大輔）

廃棄処分される予定であった車いすを、リサイクルしただけでもこんなにも感謝してもらえ。こうした実感は、やはり直接現地を訪れてみるとわからない。参加した大学生たちは、自ら体験した思いをきつと後輩たちにつなげていくことができることだろう。

今回は修理・点検・贈呈だけでなく、現地の人たちとの交流も大切な目的の一つであった。修理会場には、椰子の実ジュース（薄いスポーツドリンクのような味がしたとのこと）の差し入れがあり、スパイシーな食べ物が勢揃いしたバイキング形式の食事会等々も体験した。カレーやおかずを主食のご飯と手で混ぜ、固めて食べるというのがスリランカの食事のルールである。慣れない食習慣であったが、学生たちは徐々に慣れていく。最後の日には庭でバーベキューパーティーも開いていただき、すっかりみんな打ち解けた関係になった。

参加者たちからは口々に、「実際に海外に行くことで、自分たちの活動がどれくらい必要とされているのか、自分の目で確認でき、達成感を感じることができた」「修理や食事などを通じて、現地の人とたくさんコミュニケーションがとれた」と興奮気味に語っている。今後、より多くの学生たちが海外に出かけることで、大学生、高校生たちの縦・横のつながりが強化され、修理のクオリティもあがっていくことだろう。

これからも「空飛ぶ車いす学校グループ」のメンバーたちは、自分たちができる地道なボラ

今回が初めての取り組みだったため、タイの工業高校生に対する修理研修という点では、課題が多く残されたことは否めない。しかし「車いすリサイクルセンター計画」はまだ始まったばかりである。将来、現地の彼らに車いすの修理を任せられるようになれば、コンテナ船で運ぶ車いすの点検だけでなく、寄贈後の継続的なメンテナンスも可能になるはずだ。そうならばきつと多くの人が安心して、長い間車いすを利用できるようになるだろう。現地の工業高校生たちの参加は、プロジェクトを大きく飛躍させるためのキーポイントなのである。

スリランカへの海外渡航では、ホームステイによる語学研修も実施

さらに昨年12月1日から5日にかけて、新潟医療福祉大学FWSとKWRのメンバー8名はコンテナ輸送した大量の車いすを追いかけてスリランカに渡っている。この渡航の目的は、もちろん車いす修理や技術力の向上、現地での車いすの重要性調査等であるが、「語学研修」というのも大きな目的であった。タイでの車いす修理の報告を聞き、現地の人たちと英語でコミュニケーションできる語学力向上の重要性を痛感している。そのため今回は、スリランカのコー

ンティア活動として、車いすの修理と寄贈活動が続けていく。これは、アジアの人たちが車いすを通じて一つになれる国際活動として、今後ますます重要性を増していくはずである。決して派手さはないが、学生たちの自主的な活動だということこそ意義がある。ノーパンクタイヤの購入等、車いすの修理部品代や輸送費等の基礎財源も、彼ら自身書き損じハガキの収集をまわりに呼びかけることによって産みだしているのがある。

ぜひみなさんも彼らの活動にご理解とご協力をお願いしたいと思う。活動への参加方法は、ただ一つ。みなさんの手元に眠っている書き損じのハガキを集めて、送っていただくだけである。一人一人の力は小さくても、日本中からたくさんの協力が集まることで、アジアの人たちにこんなにも喜ばれる活動を実施することができる。それが「空飛ぶ車いす」のドラえもんプロジェクトである。学生たちの今後の活動に、これからもずっと注目していただきたい。

ディネーター、アーリヤダーサさんの家庭にホームステイさせていただくことになったのだ。訪問地および修理会場は、カルタラ県のリッチモンドキャンパスである。日本の高校生たちが修理してコンテナ輸送した100台の車いすを現地で点検してみると、ほぼ半分の46台に再修理が必要であった。これらの車いすを、みんなの手分けして1日で修理を実施している。日本で使う有機溶剤とは違うものを使っていたので少しとまどったものの、具体的な修理に支障はほとんどなかった。会場となったリッチモンドキャンパスは、英国植民地時代にはお城として使われていた場所だ。現在は、アーリヤダーサさんが管理者として幼稚園紛争などで両親を失った孤児たちの少年の家（養護施設）として使用されている。

修理会場では、現地の人たちに向けた「車いす修理講習会」も開催した。慣れない車いすの修理風景には、大人だけでなく子どもたちもたいへん興味を示してくれ、理解スピードも早かった。教える側の語学力も上達すれば、修理技術の伝達も安易になることだろう。スリランカは非常に暑い地域であり、参加者全員汗だくになりながら、現地の人たちと共に、片言の英語を駆使して車いす修理をおこなっていた。

修理後、サハナサラサ財団は希望者に贈呈式をおこなった。この地でも車いすを、心待ちにしていた方が多く、誰もがとても喜んで受け取ってくれたのには参加者全員が感動した。日本で



ハガキの送付先&活動への問い合わせ先は、公益財団法人日本社会福祉弘済会まで。
〒130-0022 東京都墨田区江東橋4-24-3
電話 03 (3846) 2172

社会福祉施設で働かれている方のために！



日社済が唯一提携しているジブラルタ生命ってどんな会社？

ジブラルタ生命保険株式会社は、135年以上の歴史を持つ世界最大級の金融サービス機関であるプルデンシャル・ファイナンシャルの一員です。
同社は、日社済『福祉の共済』事業の引受会社として、唯一提携している生命保険会社ですが、その他にも、(公財)日本教育公務員弘済会「共済事業(提携保険事業)」の引受保険会社として、全国の学校の教職員を対象にした共済を引き受けるなど、教育・福祉に従事される方々のサポートに非常に熱心な生命保険会社です。

日社済『福祉の共済』とは？

日社済は、ジブラルタ生命保険株式会社と提携し、日頃社会福祉に従事する皆様の「万」に備えるサポートをしています。普段はあまり考えない自分自身の保障のこと、プロからアドバイスをもらってみませんか？「知る」と「知らない」では大きな違いが出ます。「いつか」ではなく「今」こそ立ち止まって、大切な家族を守るために考える機会を持ってみませんか？



いつも頼りにされているあなただから、あなた自身の保障が大切

日社済は、ジブラルタ生命保険株式会社と提携し、社会福祉のフィールドで活躍する皆様への安心をサポートするお手伝いをしています。なかなか普段考えることのない自分自身の保障のこと。今、もし病気で入院したら、万-のことがあったら、どのような保障内容になっているかわからない……。思い立ったときが見直しの最適機！家族のため、自分のため、後悔しない人生を過ごしませんか。



万が一の場合・・・70%が不安！？

ご家族を支える方に万-のことがあった場合、大切なご家族の生活資金は万全でしょうか？生命保険文化センターのデータによると70%の方が不安を感じている、というのが現状のようです。社会福祉施設で働く方々をサポートする「福祉の共済」の引受会社は、ジブラルタ生命保険株式会社です。大切なスタッフを守るためにもどうぞ福祉の共済をご活用ください。

“As safe as the Rock” ～ジブラルタ・ロックのように安心～

ジブラルタ海峡に位置する長さ 4.8km、高さ 400m にもおよぶ巨大な岩山「ジブラルタ・ロック」が社名の由来です。
親会社プルデンシャル・ファイナンシャルのシンボルである「ジブラルタ・ロック」は、時を経ても変わることのない強さ、安定性、専門性、そして革新性を象徴しています。

コールセンター ▶▶▶ 0120-37-2269 ※携帯電話・PHSからもご利用になれます。
ホームページ ▶▶▶ ホームページ <http://www.gib-life.co.jp>



「公益財団法人 日本社会福祉弘済会」はジブラルタ生命と提携し「福祉の共済」を推進しています。

車椅子修理お任せ



学生ボランティアらが東北入り 岩手、宮城各地 福祉施設訪ね活動

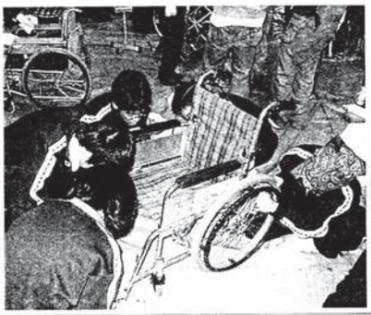
日本社会福祉弘済会(以下「弘済会」)の一環として、被災地を訪問し、福祉施設を訪ねる活動を行っている学生ボランティアらが、岩手、宮城各地の福祉施設を訪ね、車椅子の修理作業に取り組む学生ら



学生ボランティアら(2名)は、被災地を訪問し、福祉施設を訪ねる活動を行っている一環として、岩手、宮城各地の福祉施設を訪ね、車椅子の修理作業に取り組む学生ら

大森学園高等学校(大森市)の学生ボランティアら(2名)は、被災地を訪問し、福祉施設を訪ねる活動を行っている一環として、岩手、宮城各地の福祉施設を訪ね、車椅子の修理作業に取り組む学生ら

被災地に車椅子を 生徒ら修理 40台完成 大田・大森学園高



使われなくなった車椅子を修理して東日本大震災で被災した福祉施設に送ろうと、大田区大森西の大森学園高等学校(細澤正一校長)で27日、「修理会」が行われた。同校生徒を中心に160人以上が参加した。

震災では被災地の老人ホームなどで、車椅子が流されたり破損がふつたりなど被害が多発している。岩手県社会福祉協議会の調査によ

と、同県だけでも900台以上が不足している。同校は海外向けの修理活動を行っており、年一回「大修理会」を実施。昨年、大田区大森西の大森学園高等学校(細澤正一校長)で27日、「修理会」が行われた。同校生徒を中心に160人以上が参加した。

震災では被災地の老人ホームなどで、車椅子が流されたり破損がふつたりなど被害が多発している。岩手県社会福祉協議会の調査によ

修理した車椅子を高く高く生徒たち

大田の大森学園高校で

と、同県だけでも900台以上が不足している。同校は海外向けの修理活動を行っており、年一回「大修理会」を実施。昨年、大田区大森西の大森学園高等学校(細澤正一校長)で27日、「修理会」が行われた。同校生徒を中心に160人以上が参加した。

震災では被災地の老人ホームなどで、車椅子が流されたり破損がふつたりなど被害が多発している。岩手県社会福祉協議会の調査によ

淳さん(18)は「復興がんばっていきなさい」を込めて整備した車椅子。どのまじに使ってもらえるか楽しみに話していた。

【黒川将光】

働きながら

チャレンジ

国家資格に挑戦する

あなたを応援します! !



本試験と同様形式です。(マークシート付)

「チャレンジ!! 介護福祉士」国家試験 模擬問題セット

3回分

120問と正答がわかりやすい解説と一緒に掲載されています。

定価3,500円(送料込)

マークシートで自己採点や繰り返し学習に最適です。〈照会先〉「チャレンジ!! 介護福祉士」事務局 (公財)日本社会福祉弘済会 TEL.03-3846-2172

社会福祉法人 岩手県社会福祉協議会
社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会
社会福祉法人 長崎県社会福祉協議会

社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
社会福祉法人 佐賀県社会福祉協議会

公益財団法人 日本社会福祉弘済会

<http://www.nisshasai.jp>